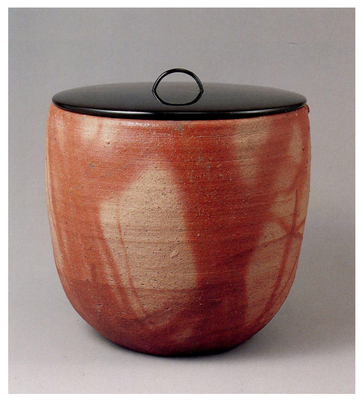
八木研究室　　分野：文化遺産の評価と保存（東洋美術史）

研究室について

八木ゼミでは、中国の仏教美術を中心とする研究をおこなっています。南北朝時代の雲岡石窟から盛唐時代の敦煌莫高窟、龍門石窟など世界遺産に認定される石窟のみならず、麦積山石窟や炳霊寺石窟、また近年河北省邯鄲市の北呉庄から出土した大理石像についても対象として、現地調査を中心とした研究を進めています。さらに、近年は中国や日本の陶磁器に関する研究をおこなう学生も在籍し、東洋美術史として幅広いテーマを取り扱っています。
以下に、これまでおこなってきた調査の中から、麦積山石窟と雲岡石窟を取り上げ紹介します。



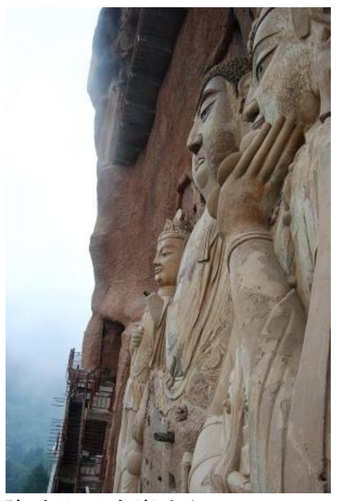
備前緋襷水指　桃山時代・16世紀
室町三井家旧蔵　三井文庫所蔵

麦積山石窟

■麦積山石窟は甘粛省天水市に位置する石窟で、敦煌、雲岡、龍門に並ぶ中国四大石窟のひとつである。積み上げられた麦わらのような山容によって、その名が付いたと言われている。この地は既に5世紀初頭、禅の修行場として栄えていた。石窟の開鑿もその頃に遡ると考えられている。石窟の総数は209、南北朝時代の石窟が多くを占める。造像活動自体は清朝まで続き、塑像は全体で7,800体、壁画は1,000㎡が現存する。
麦積山藝術研究所と世界遺産専攻との間で共同研究が開始したのは2006年。およそ5年間にわたる研究の成果は昨年中国で報告書として出版された。当研究室では美術史の立場から主に編年関する研究を進めており、学生も論文を発表しながら藝術研究所との間で交流を深めている。なお、2013年から日本の美術館で麦積山石窟に関する展覧会を開催することが決定し、現在その準備についても協力している。

■麦積山石窟virtual tour（2007年公開）
http://www.maijishan.cn/mjsskxnmy/jp_html/index.html

■出版物：
・麦積山石窟藝術研究所編『麦積山石窟研究』（文物出版社、2010年）
・麦積山石窟藝術研究所・筑波大学世界遺産専攻合編『麦積山石窟環境与保護調査報告書』（文物出版社、2011年）

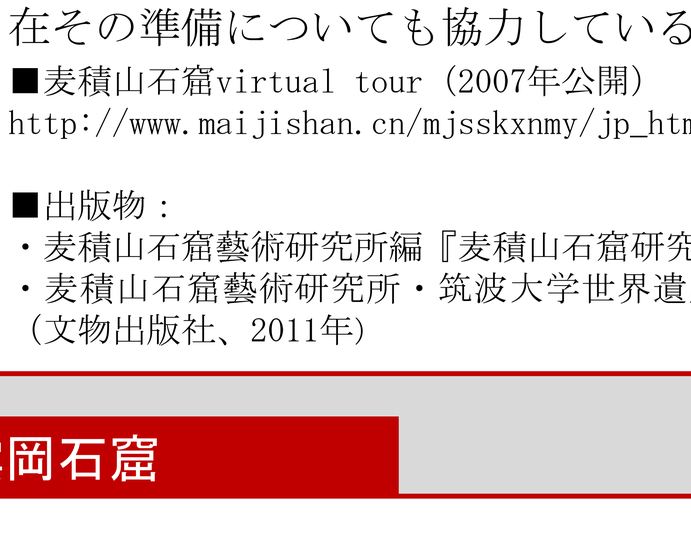


隋時代の摩崖大仏

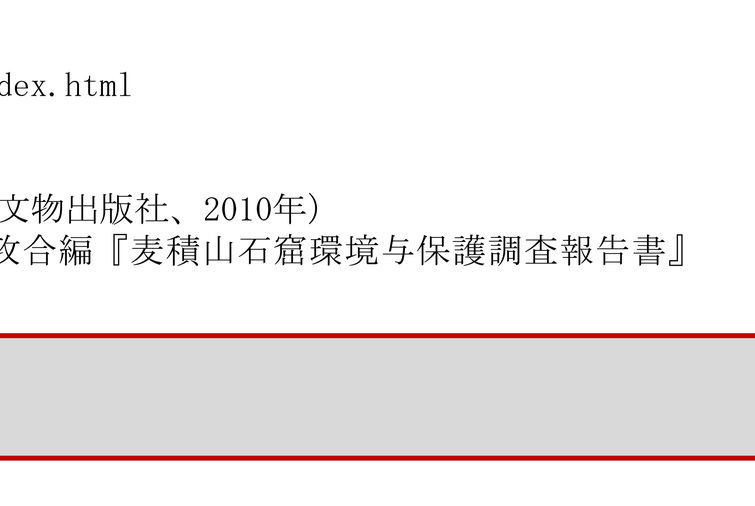
霧雨の中の麦積山石窟

雲岡石窟

■雲岡石窟は山西省大同市に位置する石窟である。2001年に世界文化遺産に登録された。石窟の開鑿は460年に始まったとされる。この地は当時平城と呼ばれ、鮮卑族の国家である北魏の都であった。中国最初の国家的造営としての石窟寺院であり、494年の洛陽遷都以前に開かれた大規模な石窟と造像群は、その後も中国北方で盛行した石窟造営に大きな影響を与えている。また、遷都後も造像活動自体は規模を縮小しつつも盛んであり、雲岡全体に現存する石像は5万3千体に上ると言われる。
当研究室では2011年より年に一度雲岡石窟研究院と研究会を開き、相互の研究発展のため交流を進めている。2014年まで年に１度雲岡石窟研究院において研究会が開催され、学生も発表をおこなった。



2012年中日雲岡学術検討会の様子
日本側の発表者と題目は
八木春生「雲岡西方諸窟について」
因幡聡美（博士後期）「雲岡石窟第三期諸窟の複合龕について」
熊坂聡美（博士後期）「雲岡石窟第18窟の二仏並坐像について」



第20窟周辺

第18窟主尊